

長い梅雨もようやく明け、本格的な夏がやってきました。
熱中症にならないよう健康管理しましょうね。



「押してもいい?」

中日新聞の「ほろほろ通信」というコラムの内容です。

+ + + + +

愛知県津島市にお住まいのおばあさんの「ほろほろする」
お話です。

二人のお孫さんとお墓参りに出かけた時のことだそうです。

津島市から愛知県の東端にある豊橋市までは、途中乗
り換えを含めて1時間半ほど電車に乗ります。そこからさ
らにバスに乗り換える。8歳と6歳の女の子にとっては、ち
よつとした旅です。

帰りのバスの中でのことでした。

お孫さんたちは運転手さんの真後ろに陣取りました。次
の停留所がアナウンスされます。お孫さんたちは、おばあ
さんに尋ねました。

「押してもいい?」

「だめよ」

と答えましたが、よほど降車ボタンが気に入った様子。
アナウンスのたびに何度も二人で

「押してもいい?」

と聞いてきます。

その様子を耳にしていた運転手さんがおばあさんに、

「どこまで行かれますか」

と尋ねました。降りる場所がわからないのではないかと
気遣ってくれたようでした。

「終点まで行きます」と返事をしました。

やがて終点を告げる録音のアナウンスが社内に流れま
した。お孫さんたちはボタンを押さなくてもよいことがわ
かり、がっかりしてしまいました。

その時です。マイクを通して運転手さんの声が聞えました。

「ボタン押してもいいよー」

上の子はおばあさんの顔を覗き込むようにして、

「いいの?」と聞きました。

「うん」

と言うと、すかさずボタンを押しました。

「ピンポーン」

につこりとして本当にうれしそうでした。

またまた運転手さんの声が社内に流れました。

「もう一人の子も押していいよ」

下の子も喜んで、

「ピンポーン」

乗客全員がその様子を見ていました。バスを降りると二
人とも大きな声で運転手さんに「ありがとう」と言って手
を振りました。ところが、終点なので時間が来るまでバス
はなかなか発車しません。二人は、バスが再び動き出すま
でずっと手を振り続けました。

お孫さんたちは、

「またお墓参り行くうね」

と言っているそうです。



「毎日が楽しくなる17の物語」より抜粋

株式会社 三悦

代表取締役 樋田 浩三

令和八年七月